

「あの子の笑顔」

春日 悠里花

「ここのチームひとり足りないんだけど、誰か入ってくれる？」

「はい！俺いきます！」

「ありがとう！」

今日は休み時間にクラスのみんでドッジボールをする。私の小学校では“みんな遊び”といって、ある一定の頻度で、クラス全員で休み時間に遊ぶというちょっとしたイベントがある。みんなで遊ぶなんて私にとっては煩わしいだけだ。

「春日さんがあっちのチームにいてくれればよかったのにー。ねー！」

またこれだ。いつものことだ。きっと私にわざと聞こえるように話しているのだろう。

がまん、がまん。私は小学六年生のときにある女子達からいじめを受けていた。受験生でもあった私は少しでも面倒くさいことは避けておこうといつも教室の端っこにいた。

なるべく目立たないように、存在を隠すように。

私の学年は、そしてとくに私のクラスは大きく分けて二つのグループに分かれていた。いわゆる陰キャと陽キャ。陽キャグループの人たちは毎日王様ゲームでキャーキャー盛り上がり、陰キャグループは隅っこで折り紙をしたり、絵を書いて遊んでいた。ついこの前までこういった環境が当たり前だと思っていたし、私も陽キャグループに入ろうと必死になっていた時期もあった。でも、受験で塾に通うようになり、他校の子と友達になって初めて気がついた。私が生きてきたこの環境がどれだけ醜くて悲惨なものであったかを。それから陽キャグループに入りたいなどというおかしい願望は一瞬にして消え去った。卒業して私立の中学に合格すればこの環境からもいじめからも開放される。あともう少しの辛抱だ。

私は毎日毎日、そう自分に言い聞かせてきた。そんなときだった。ひろちゃん（仮名）と出会ったのは。

「ゆーりーかーちゃん！一緒にかーえーろー！」

ある日ひろちゃんにそう話しかけられた。

ひろちゃんは心にちょっとした障がいを抱えているらしいが、明るくて、行動一つ一つが本当に可愛かった。彼女とは六年生になって初めて同じクラスになった。でも、初めて話した時はいじめや受験でゴタゴタしていて、ちゃんとはなすことができなかった。その後、受験にうかり、いじめもピタリと止んだ。なぜいじめがなくなったのかは知らないけど、少し助かった。でもやっぱり、昔から気の強かった私も、流石に何ヶ月も続きたいじめはこたえたようで、思い出すだけで涙が止まらなかった。そんなある日、私は見てしまった。

ひろちゃんのことをついこの前まで私をいじめていた女子のグループが掃除箱に閉じ込めるところを。最初はひろちゃんが笑いながら掃除箱に入っていったから遊んでいるのかと思っていた。でも、その後、彼女たちは、ひろちゃんが入っている掃除箱の扉を

ふさぎひろちゃんは泣きながら、やっとのことで掃除箱から出てきた。私は息が詰まった。先生に向かって、泣いて必死に訴えるひろちゃん。

でもひろちゃんをいじめた子たちは涼しい顔で「ひろちゃんが入りたいって言ったから入らせてあげたのよ。」と言っていた。彼女たちの会話をちゃんと聞けなかったことと、ひろちゃんが笑いながら掃除箱に入っていったことで私も何も言うことができなかった。いや、またいじめられることが怖かったからそう言い訳したかっただけなのかもしれない。

その時、私はとっても後悔した。どうしてひろちゃんを守れなかったのだろう、と。だから、私は決心した。卒業するまでひろちゃんのそばにしよう。何があっても一緒にしよう。それから、私はいつでもひろちゃんと一緒だった。学校にいるときも帰る時もいつでも。でも、そんなある日、私は気づいた。ひろちゃんを助けようと始めたことだったけど、ひろちゃんと共に過ごすことで私の方が救われていたことに。

この一年間、本当に苦しかった。毎日毎日、汚らしいものでも見るかのような目つきで見られ、なにかと舌打ちをされ、プリントをぐちゃぐちゃにされ、苦しくて辛すぎて、生きている意味すら見いだすことができなかった。

でも、何よりもつらかったことは、そばで手を差し伸べてくれる友達が一人もいなかったことだった。そんな私に生きる希望を、喜びを教えてくれたのはひろちゃんだった。どんなに、苦しいことがあってもどんなに悲しいことがあっても次の日にはけろりとして私に満面の笑みで話しかけてくれる。なんていい子なのだろうと心の底から思った。

小学校を卒業してもう四年もたった。ひろちゃんとはまだつながっていて、彼女は今、特別支援の高校に入学し、楽しく過ごしているそうだ。私は今でもいじめられたときのことがトラウマで思い出すと涙が止まらない。

でも、同時にひろちゃんの笑顔を思い出す。あの純粹で一点の曇もないまっすぐな笑顔を。そうすると、私の心は軽くなる。

この体験から言えることはただ一つ。障がいがあるんだ。普通じゃないのがなんだ。現に私の身の回りでは、障がいを持っていないと言われる人たちのほうが心が濁っていた。障がいの有無の境界線なんて私にはよくわからない。ただ純粹で心が澄んでいれば障害があってもなくても、その人は誰よりも素晴らしい、最高の人間だと私は思う。